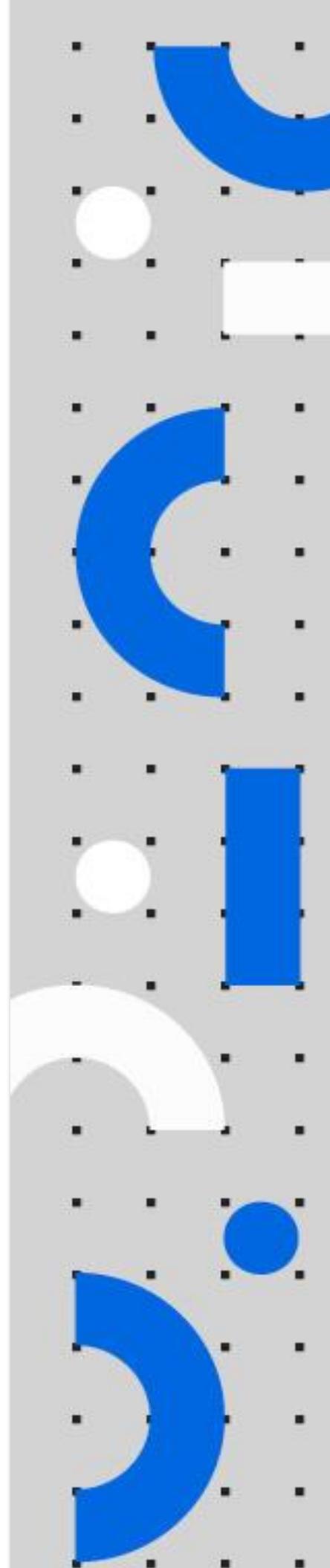


UiPath Orchestrator 導入 ステップバイステップガイド

v2021.4 対応版



リビジョン履歴

Date	Version	Author	Description
9 th June 2018	2018.2	Hideaki.F	First version for v2018.2 release
1 st Nov 2018	2018.3	Hideaki.F	Updated for v2018.3 release
31 st May 2019	2019.4	Hideaki.F	Updated for v2019.4 release
14 th Nov 2019	2019.10	Hideaki.F	Updated for v2019.10 release
18 th May 2020	2020.4	Hideaki.F	Updated for v2020.4 release
22 nd Dec 2020	2020.10	Hideaki.F	Updated for v2020.10 release
10 th May 2021	2021.4	Hideaki.F	Updated for v2021.4 release

商標について

- UiPath のソフトウェア、製品、サービス、(これには、UiPath Orchestrator、UiPath Robot、UiPath Studio が含まれますが、これらに限りません) はアメリカ合衆国で登録された UiPath Inc.、 および 他の国・地域で登録された UiPath の関係会社の商標または登録商標です。UiPath のロゴは UiPath Inc. が所有するものであり、UiPath の事前の明示的な許可なく、お客様及びその他の方が使用することはできません。
- Microsoft のソフトウェア、製品、サービス (これには、Microsoft、Windows、Windows Server、SQL Server 及び Active Directory が含まれますが、これらに限りません) は アメリカ合衆国で登録された Microsoft Corporation 及び他の国・地域で登録されたその関係会社の商標または登録商標です。
- Oracle のソフトウェア、製品、サービス (これには、Java も含まれますがこれに限りません) は アメリカ合衆国で登録された Oracle 及びその他の国・地域で登録された関係会社の商標または登録商標です。
- Elastic は、Elastic N.V. 及びその関係会社の商標または登録商標です。
- Redis は、Redis Labs Ltd の商標です。
- その他、記載されている製品名、会社名およびサービス名はそれぞれの各社の商標または登録商標です。

免責事項

- 本ガイドの内容は 2021 年 4 月現在の情報であり、下記の製品リリースに基づいております。
 - UiPath Orchestrator v2021.4
- 製品の新しいリリース、修正プログラムなどによって、本ガイドの説明と異なる動作・仕様となる可能性がありますので、予めご留意ください。
- 本ガイドに含まれる情報は可能な限り正確を期しておりますが、UiPath 株式会社の正式なドキュメントではありません。本ガイドに記載された内容に関して UiPath 株式会社は何ら保証していません。従って、本ガイドに含まれる情報の利用はお客様の責任においてなされるものであり、UiPath はガイドの内容によって受けたいかなる被害に関して一切の補償をするものではありません。
- 本ガイドは UiPath を法的に拘束する書類ではありません。UiPath はお客様に通知なくして、本ガイドの内容の一部または全部を修正及びアップデートできます。
- お客様は UiPath および執筆者の書面の承諾なしで本ガイドを複製、修正、頒布できません。

目次

内容

リビジョン履歴	1
商標について	2
免責事項	2
目次	3
1. はじめに	4
1.1. 本文書の目的と前提条件	4
1.2. Orchestrator v2020.10 以降での注意事項	5
1.3. 機能・製品ごとの追加インストール手順	5
2. Orchestrator インストール前の準備	6
2.1. 必要なコンポーネントのダウンロード	6
2.2. 前提条件のコンポーネントのインストール	7
2.3. サーバー証明書のインストール	12
2.4. SQL Server のインストールと設定	14
3. Orchestrator インストール手順	19
3.1. 構成に応じた手順の概要	19
3.2. Orchestrator インストール (スタンドアロン構成)	19
4. Orchestrator 動作確認と初期設定	24
4.1. Orchestrator インストール確認と初期設定	24
4.2. UiPath Robot / Studio との接続設定	28
5. 技術支援のご案内	30

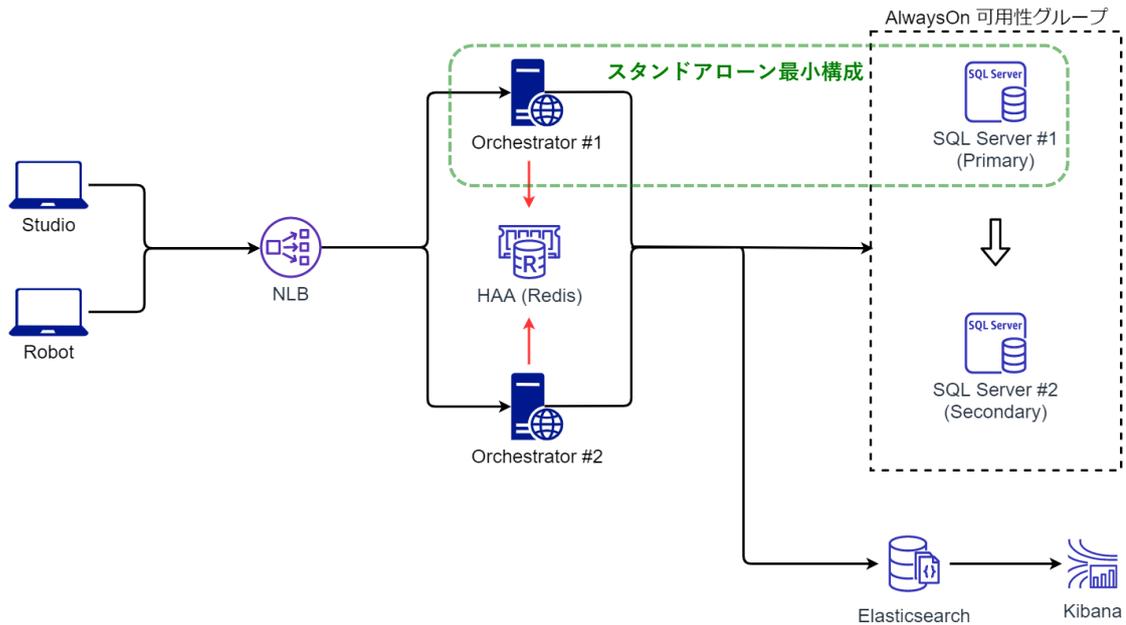
1. はじめに

1.1. 本文書の目的と前提条件

- 本文書では Orchestrator v2021.4 を Windows Server 2016 (日本語) にインストールする手順について説明します。スクリーンショットは主に Windows Server 2016 環境で取得していますが、手順はソフトウェア要件を満たす他の OS バージョンにおいても同様です。
- 本文書は Orchestrator v2019.10 および v2020.10 にも対応しております。Orchestrator のバージョンに依存する手順については、下記の注意書きを適宜加えております。

注意書き	v2019.10	v2020.10	v2021.4
【OC v2019.10】	○	×	×
【OC v2020.10 以降】	×	○	○
【OC v2021.4】	×	×	○
注意書き無し	○	○	○

- Orchestrator 各バージョンにおけるサポート期間については [プロダクトライフサイクル](#) をご参照ください。Orchestrator v2019.4 以前と v2020.4 については本文書では対象外としております。
- 本文書を参照するにあたり下記の事項が前提知識となります。
 - Windows Server の概要と基本操作
 - IIS (インターネットインフォメーションサービス) の概要と基本操作
 - SQL Server の概要と基本操作
 - UiPath Orchestrator の概要: <https://www.uipath.com/ja/product/orchestrator>
- システム要件は Web サイトのガイドを参照してください。
 - ハードウェア要件: <https://docs.uipath.com/installation-and-upgrade/lang-ja/docs/orchestrator-hardware-requirements>
 - ソフトウェア要件: <https://docs.uipath.com/installation-and-upgrade/lang-ja/docs/orchestrator-software-requirements>
- 最小構成では Orchestrator と SQL Server をそれぞれインストールするために 2 台の Windows Server を準備します。検証環境では共存も可能ですが、本番環境では分離することを強く推奨します。なお冗長構成や Elasticsearch を使用する場合には、更に多くの台数のサーバーマシンが必要となります。
 - 構成の一例を下記に示します。緑点線で囲まれた 2 台構成がスタンドアロン最小構成となります。



- Network Load Balancer (NLB) の構成、HAA (Redis) の構成、SQL Server の冗長化、Elasticsearch の冗長化については本文書では取り扱いません。

1.2. Orchestrator v2020.10 以降での注意事項

- 【OC v2020.10 以降】 Orchestrator サイトのアプリケーション設定を行う設定ファイルが、従来の Web.config から UiPath.Orchestrator.dll.config というファイルに変更となりました。サイトの設定変更を行う際には編集するファイルにご注意ください。
- なお旧バージョンからのアップグレード時には設定は自動的に引き継がれます。

1.3. 機能・製品ごとの追加インストール手順

- 下記の機能または製品を使用される場合には追加のインストール手順が必要となる場合があります。それぞれの参照リンクをご確認ください。

機能	参照リンク
Windows 認証	https://docs.uipath.com/orchestrator/lang-ja/docs/enabling-windows-authentication
Test Suite	https://docs.uipath.com/installation-and-upgrade/lang-ja/docs/test-manager-installation
Action Center	https://docs.uipath.com/installation-and-upgrade/lang-ja/docs/action-center-installation
AI Center	https://docs.uipath.com/ai-fabric/lang-ja/docs/3-configure-orchestrator
Insights	https://docs.uipath.com/installation-and-upgrade/lang-ja/docs/insights-installation#modifying-an-orchestrator-install-for-insights
Elasticsearch/Kibana	https://docs.uipath.com/installation-and-upgrade/lang-ja/docs/orchestrator-the-windows-installer → [Elasticsearch ログ設定]

2. Orchestrator インストール前の準備

2.1. 必要なコンポーネントのダウンロード

前提条件となる次のコンポーネントをダウンロードします。

- Orchestrator
 - .NET Framework 4.7.2: <https://support.microsoft.com/ja-jp/help/4054530/microsoft-net-framework-4-7-2-offline-installer-for-windows>
 - または .NET Framework 4.8: <https://support.microsoft.com/ja-jp/help/4503548/microsoft-net-framework-4-8-offline-installer-for-windows>
 - ◇ 前提条件の .NET Framework バージョンは **4.7.2** 以上となっています。
 - ◇ Windows Server 2012 R2 で .NET Framework をインストールするには、あらかじめ **KB2919355** が適用されていることを確認します:
<https://www.microsoft.com/ja-jp/download/details.aspx?id=42334>
 - 【OC v2020.10 以降】 .NET Core 3.1 Hosting Bundle:
<https://dotnet.microsoft.com/download/dotnet-core/3.1>
 - ◇ 3.1.x 最新版の Windows → [Hosting Bundle] をクリック
 - URL Rewrite 2.1: <https://www.iis.net/downloads/microsoft/url-rewrite>
 - ◇ English: x64 を使用
 - Orchestrator ロール設定スクリプト:
<https://raw.githubusercontent.com/UiPath/Infrastructure/master/Setup/InstallRolesAndFeatures.ps1>
 - ◇ ブラウザーで開き、Ctrl+S で拡張子.ps1 として保存します。
 - 最新版 Orchestrator インストーラー: <https://download.uipath.com/UiPathOrchestrator.msi>
- Microsoft SQL Server
 - 適切なエディションのメディアを準備します。
 - ◇ 検証目的の場合では Express Edition も使用可能です:
<https://www.microsoft.com/ja-JP/download/details.aspx?id=55994>
 - ◇ SQL Server 2017 Express Edition の制限事項についてはこちらをご参照ください。
<https://docs.microsoft.com/ja-jp/sql/sql-server/editions-and-components-of-sql-server-2017?view=sql-server-2017>
 - ◇ なお Orchestrator 本番環境では Express Edition の SQL Server はサポートされません。
 - Microsoft SQL Server Management Studio (SSMS):
<https://docs.microsoft.com/ja-jp/sql/ssms/download-sql-server-management-studio-ssms>
- 注意:
 - 旧バージョン Orchestrator インストーラーが必要な場合には UiPath 社までお問い合わせください。
 - 前提条件のそれぞれのコンポーネントと UiPath インストーラーをダウンロードした後、それぞれのファイルを右クリック→プロパティを開き、セキュリティ「許可する」チェックをオンにします。



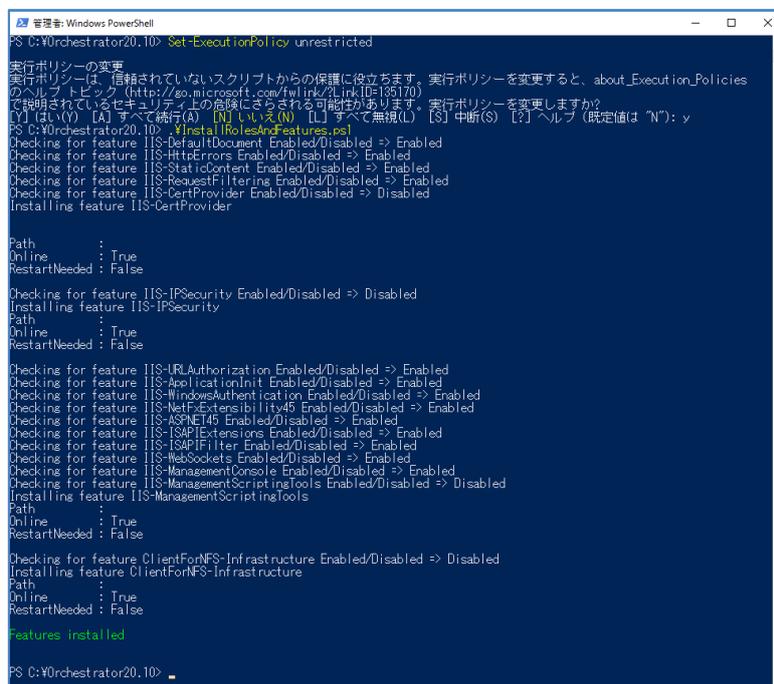
2.2. 前提条件のコンポーネントのインストール

- Orchestrator をインストールするサーバーでロール設定スクリプトを実行し、必要な役割と機能を有効にします。
 - InstallRolesAndFeatures.ps1 をローカルディレクトリにコピーします。
 - Windows PowerShell (64 ビットモード) を管理者として実行します。
 - 次のコマンドを実行し、PowerShell スクリプトの実行を許可します。

Set-ExecutionPolicy Unrestricted

- 解凍ディレクトリに移動し、次のコマンドを実行し、エラーが発生しないことを確認します。

.\InstallRolesAndFeatures.ps1



- サーバーマネージャーで役割と機能の追加ウィザードを起動し、次の役割と機能がインストールされていることを確認します。ここに示す機能は最低限インストールすべきものであり追加の機能がインストールされていても問題ありません。

サーバーの役割	
[X] Web サーバー (IIS)	Web-Server
[X] Web サーバー	Web-WebServer
[X] HTTP 共通機能	Web-Common-Http
[X] HTTP エラー	Web-Http-Errors
[] ディレクトリの参照 (※ 注意 2)	Web-Dir-Browsing
[X] 既定のドキュメント	Web-Default-Doc
[X] 静的なコンテンツ	Web-Static-Content
[] HTTP リダイレクト	Web-Http-Redirect
[] WebDAV 発行	Web-DAV-Publishing
[X] セキュリティ	Web-Security
[X] 要求フィルター	Web-Filtering
[] IIS クライアント証明書マッピング認証	Web-Cert-Auth
[] IP およびドメインの制限 (※ 注意 2)	Web-IP-Security
[] SSL 証明書の集中サポート (※ 注意 2)	Web-CertProvider
[X] URL 承認	Web-Url-Auth
[X] Windows 認証	Web-Windows-Auth
[] クライアント証明書マッピング認証	Web-Client-Auth
[] ダイジェスト認証	Web-Digest-Auth
[] 基本認証	Web-Basic-Auth
[] パフォーマンス	Web-Performance
[] 静的なコンテンツの圧縮 (※ 注意 2)	Web-Stat-Compression
[] 動的なコンテンツの圧縮	Web-Dyn-Compression
[] 状態と診断	Web-Health
[X] HTTP ログ (※ 注意 3)	Web-Http-Logging
[] ODBC ログ	Web-ODBC-Logging
[] カスタム ログ	Web-Custom-Logging
[] トレース	Web-Http-Tracing
[] ログ ツール	Web-Log-Libraries
[] 要求の監視	Web-Request-Monitor
[X] アプリケーション開発	Web-App-Dev
[] .NET 拡張機能 3.5	Web-Net-Ext
[X] .NET 拡張機能 4.6	Web-Net-Ext45
[X] Application Initialization (※ 注意 4)	Web-Applnit
[] ASP	Web-ASP

<input type="checkbox"/> ASP.NET 3.5 <input checked="" type="checkbox"/> ASP.NET 4.6 <input type="checkbox"/> CGI <input checked="" type="checkbox"/> ISAPI フィルター <input checked="" type="checkbox"/> ISAPI 拡張 <input checked="" type="checkbox"/> WebSocket プロトコル <input type="checkbox"/> サーバー側インクルード <input type="checkbox"/> FTP サーバー <input type="checkbox"/> FTP サービス <input type="checkbox"/> FTP 拡張 <input checked="" type="checkbox"/> 管理ツール <input checked="" type="checkbox"/> IIS 管理コンソール <input type="checkbox"/> IIS 6 管理互換 <input type="checkbox"/> IIS 6 メタベース互換 <input type="checkbox"/> IIS 6 WMI 互換 <input type="checkbox"/> IIS 6 スクリプト ツール <input type="checkbox"/> IIS 6 管理コンソール <input type="checkbox"/> IIS 管理スクリプトおよびツール (※ 注意 2) <input type="checkbox"/> 管理サービス	Web-Asp-Net Web-Asp-Net45 Web-CGI Web-ISAPI-Filter Web-ISAPI-Ext Web-WebSockets Web-Includes Web-Ftp-Server Web-Ftp-Service Web-Ftp-Ext Web-Mgmt-Tools Web-Mgmt-Console Web-Mgmt-Compat Web-Metabase Web-WMI Web-Lgcy-Scripting Web-Lgcy-Mgmt-Console Web-Scripting-Tools Web-Mgmt-Service
機能	
<input checked="" type="checkbox"/> .NET Framework 4.6 Features <input checked="" type="checkbox"/> .NET Framework 4.6 <input checked="" type="checkbox"/> ASP.NET 4.6 <input type="checkbox"/> WCF サービス <input type="checkbox"/> HTTP アクティブ化 <input type="checkbox"/> TCP アクティブ化 <input type="checkbox"/> TCP ポート共有 <input type="checkbox"/> メッセージ キュー (MSMQ) アクティブ化 <input type="checkbox"/> 名前付きパイプのアクティブ化 <input checked="" type="checkbox"/> NFS クライアント (※ 注意 5)	NET-Framework-45-Features NET-Framework-45-Core NET-Framework-45-ASPNET NET-WCF-Services45 NET-WCF-HTTP-Activation45 NET-WCF-TCP-Activation45 NET-WCF-TCP-PortSharing45 NET-WCF-MSMQ-Activation45 NET-WCF-Pipe-Activation45 NFS-Client

- 注意 1: PowerShell スクリプトの実行が失敗する場合には、上記の役割と機能をサーバーマネージャーにより手動で追加します。
- 注意 2: ディレクトリ参照、IP およびドメインの制限、SSL 証明書の集中サポート、静的なコンテンツの圧縮、IIS 管理スクリプトおよびツールは PowerShell スクリプトにより有効化されますが、Orchestrator の稼働においては必須ではないため削除しても構いません。

- 注意 3: HTTP ログ機能は必須ではありませんが、トラブルシューティングなどの際に IIS ログが必要となる場合があります。無効化されている場合には管理者権限 PowerShell コンソールで次のコマンドを実行し、有効化することを推奨します。

```
Install-WindowsFeature -Name Web-Http-Logging
```

- 注意 4: 【OC v2020.10 以降】アプリケーション開発 > **Application Initialization** は v2020.10 以降で必須となります。Orchestrator アップグレード時などにおいて、この機能を個別にインストールするには管理者権限 PowerShell コンソールで次のコマンドを実行します。

```
Install-WindowsFeature -Name Web-AppInit
```

- 注意 5: NuGet パッケージディレクトリとして NFS ストレージを使用する場合に NFS クライアントが使用されます。不要な場合にはこの機能を削除しても構いません。

- 次のコンポーネントを順次インストールします。

	<p>.NET Framework 4.7.2 または 4.8</p>
	<p>【OC v2020.10 以降】 .NET Core 3.1 Hosting Bundle</p>
	<p>URL Rewrite 2.1</p>

2.3. サーバー証明書のインストール

- IISにてHTTPS通信を行うためサーバー証明書をパブリック証明機関(CA)、ドメイン証明機関(CA)または自己署名にて発行します:

<https://docs.uipath.com/installation-and-upgrade/lang-ja/docs/using-a-certificate-for-the-https-protocol>

- 【OC v2020.10以降】インストール時のサーバー証明書のチェックが厳格になっています。ドメイン証明書を使用する場合は次の点に注意してください。

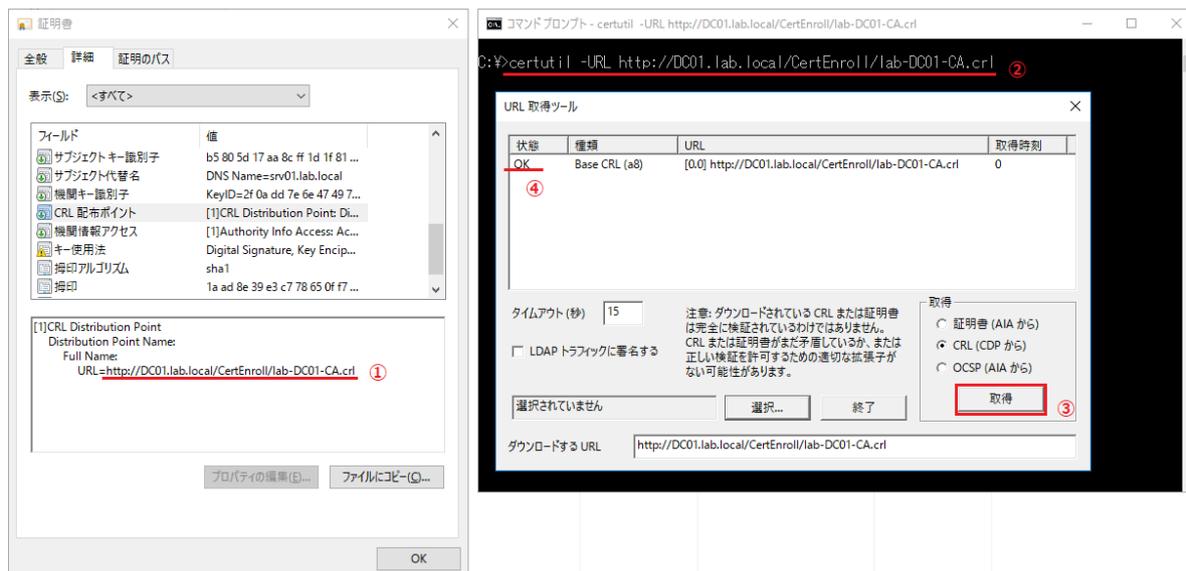
- 公開鍵のサイズはRSA 2048 bit以上で発行します。RSA 1024 bitの場合にはエラーとなります。
- CRL(証明書失効リスト)がOrchestratorをインストールするマシン上にキャッシュされていない場合には、次の手順でサーバー証明書のCRL配布ポイントにアクセス可能であることを確認します。

- ✧ ① サーバー証明書の詳細 → CRL配布ポイントのURLを確認します。
- ✧ ② コマンドプロンプトにて次のコマンドを実行します。

```
certutil -URL <CRL 配布ポイントの URL>
```

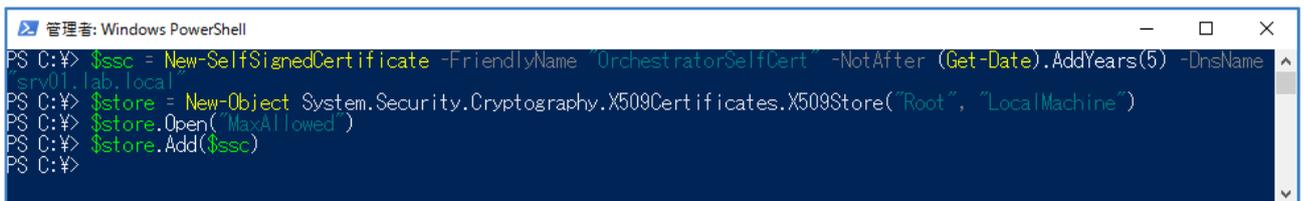
- ✧ ③ URL取得ツールにて[取得]ボタンをクリックします。
- ✧ ④ 状態が「OK」と表示されることを確認します。

- CRL配布ポイントにアクセスできない場合でもサーバー証明書が失効されていないことをドメインCA上でご確認の上、インストールを続行することができます。



- 自己署名証明書を発行するには次の手順を実行します。
 - 管理者権限 PowerShell コンソールを起動し、次のコマンドを実行します。 -DnsName パラメーターには Orchestrator アクセス URL のホスト名または FQDN を指定します。有効期限は 5 年としていますが、変更するには AddYears(5) の値を変更します。

```
$ssc = New-SelfSignedCertificate -FriendlyName "OrchestratorSelfCert" -NotAfter (Get-Date).AddYears(5) -DnsName <Orchestrator-FQDN>
$store = New-Object System.Security.Cryptography.X509Certificates.X509Store("Root", "LocalMachine")
$store.Open("MaxAllowed")
$store.Add($ssc)
```



- IIS マネージャ > サーバー証明書にて自己署名証明書が作成されていることを確認します。



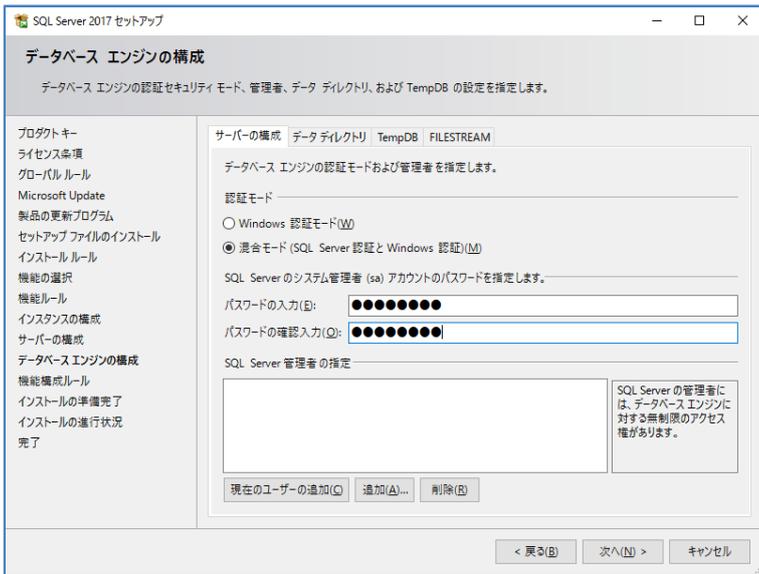
- 注意点

- IIS マネージャ > サーバー証明書 > 「自己署名入り証明書の作成」によって作成される自己署名書には SAN (Subject Alternative Names: サブジェクト別号) が付加されません。SAN を持たないサーバー証明書がバインドされた Web サイトにアクセスする際、Google Chrome などのブラウザでは警告が表示されます。このため上記 PowerShell コマンドを使用して DNS 名が SAN として追加されたサーバー証明書を作成することを推奨します。
- サーバー証明書を複数の Orchestrator ホストで共有する場合など、詳細については次のサイトを参照してください: <https://docs.uipath.com/installation-and-upgrade/lang-ja/docs/using-a-certificate-for-the-https-protocol>

2.4. SQL Server のインストールと設定

- SQL Server インストールと設定には次の点に留意します。本文書では最低限の設定のみ示しており、冗長構成や大規模運用における最適な設定は別途考慮が必要となります。

	<p>必要最低限の機能はデータベースエンジンのみです。</p> <p>必要に応じて追加機能を選択します。</p>
	<p>サーバー構成で [照合順序] > [カスタマイズ] をクリックし、下記の通り 照合順序を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 照合順序指定子: Latin1_General ● 大文字と小文字を区別する: オフ ● アクセントを区別する: オン <p>OK をクリックし、照合順序が Latin1_General_CI_AS と表示されることを確認します。</p> <p>※ 既に構築済みの共用 SQL Server を利用する場合など照合順序を指定できない場合には、データベースを作成する際に照合順序を指定します。</p>



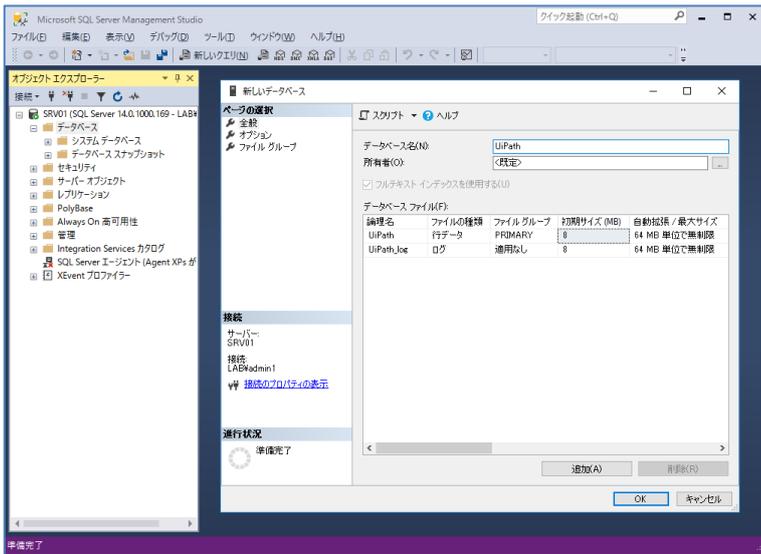
必要に応じて認証モードとして混合モードを有効にします。

認証モードの詳細については次のサイトを参照してください。

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/sql/relational-databases/security/choose-an-authentication-mode?view=sql-server-2017>



次に SSMS (SQL Server Management Studio) をインストールします。



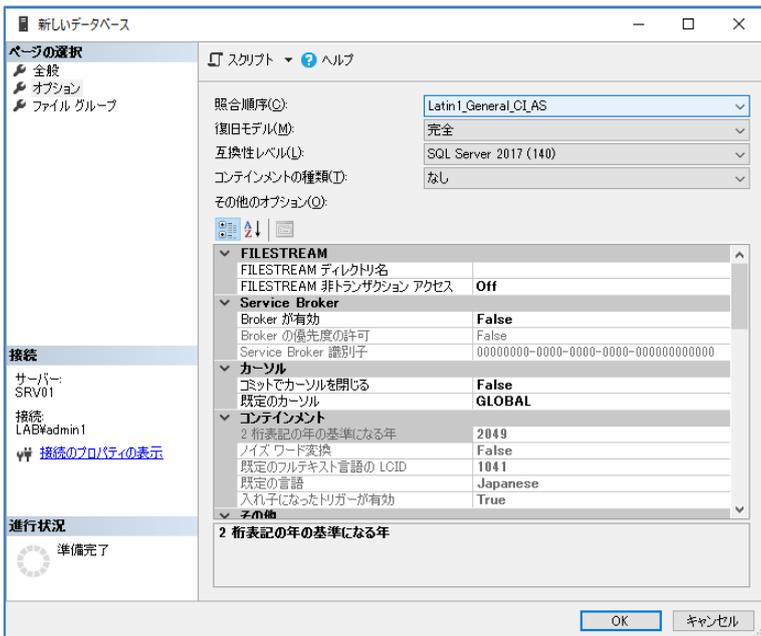
Management Studio を使用して SQL Server にログインします。

[データベース]>[新しいデータベース]をクリックし、"UiPath" という名前で DB をあらかじめ作成します。

環境に応じて行データ・ログの設定値を変更します。下記は例となります。

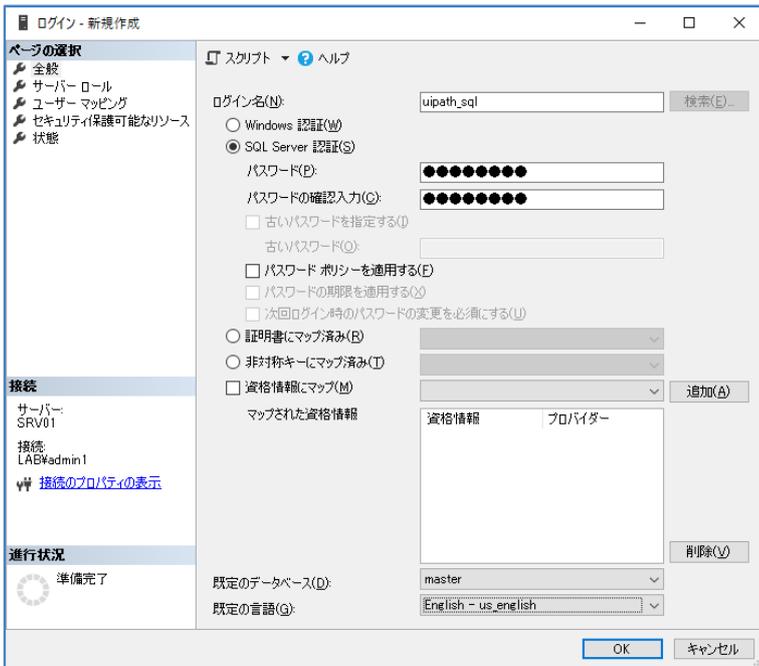
- 初期サイズ: 30720 MB (30 GB)
- 自動拡張サイズ: 1024 MB
- DB ファイルのパス: C ドライブ以外を推奨

OK をクリックする前に、オプションタブをクリックします。



照合順序として

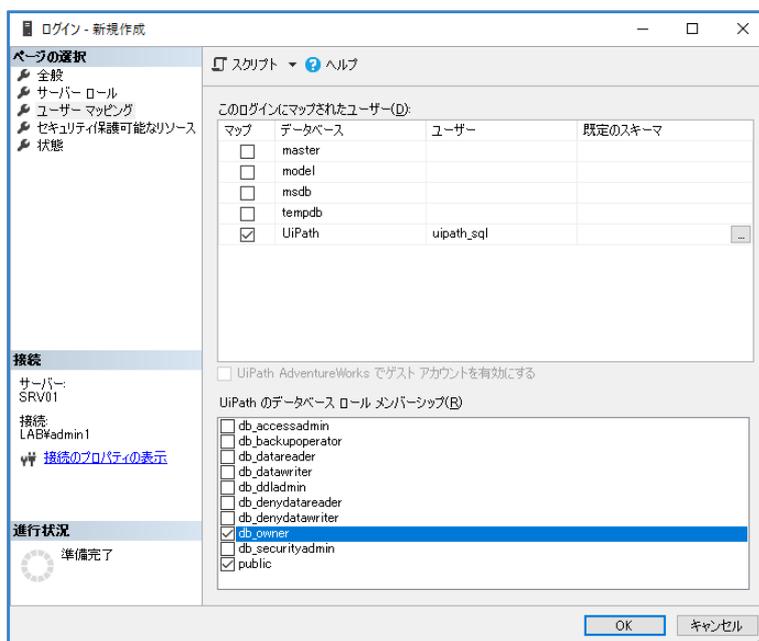
Latin1_General_CI_AS を選択し、OK をクリックします。



[セキュリティ]>[ログイン]>[新しいログイン]をクリックし、新しい管理ユーザーを Windows 認証または SQL Server 認証にて作成します。

更に既定の言語を **English - us_english** に設定します。

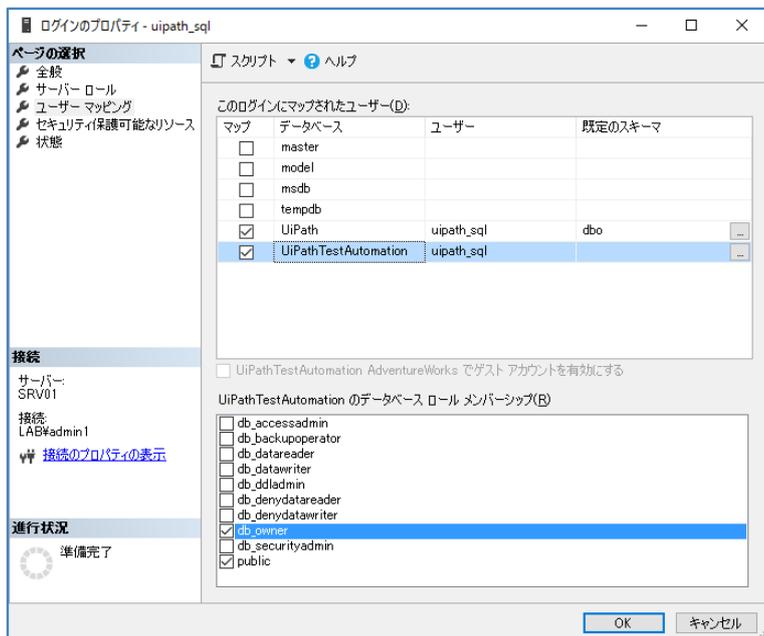
左図の例では "uipath_sql" というログイン名で SQL Server 認証を使用しています。



ユーザーマッピングにて **UiPath** データベースに対して **db_owner** ロールを付与します。



新しく作成したユーザーで SQL Server にログインできることを確認します。



【OC v2020.10 以降】 Testing Robot を使用する場合、"UiPath" データベースとは別に "UiPathTestAutomation" という名前でデータベースを作成し、上記と同じ手順により、このデータベースに対しても接続ユーザー (例では "uipath_sql") に db_owner 権限を付与します。

3. Orchestrator インストール手順

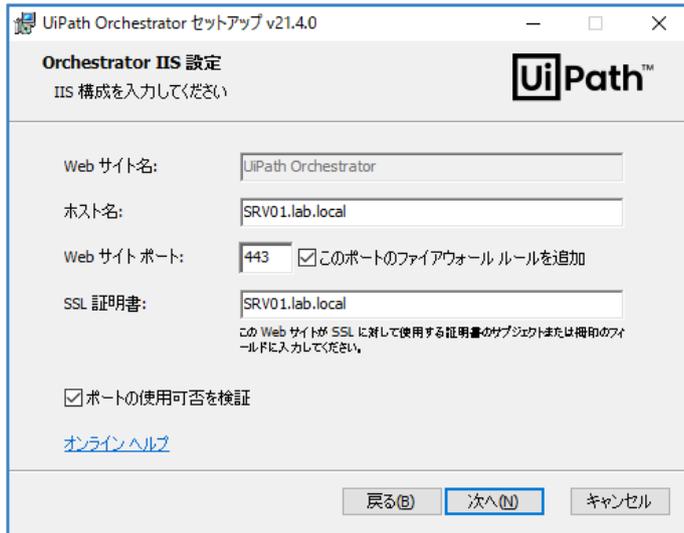
3.1. 構成に応じた手順の概要

- Orchestrator のインストール手順は冗長化構成有無により異なります。
 - 冗長化構成なし … [手順 3.2](#) 参照
 - 冗長化構成あり … [Web ガイド](#) 参照

3.2. Orchestrator インストール (スタンドアローン構成)

- MSI インストーラー **UiPathOrchestrator.msi** を使用して Orchestrator をインストールするには次の手順を実行します。詳細な手順は <https://docs.uipath.com/installation-and-upgrade/lang-ja/docs/orchestrator-the-windows-installer> をご参照ください。

	<p>UiPathOrchestrator.msi を実行し、使用許諾契約書に同意し、[インストール] をクリックします。</p>
	<p>【OC v2020.10 以降】 必要に応じてインストールする機能を選択します。Testing Robot を使用するには Test Automation 機能を選択します。その場合、あらかじめ "UiPathTestAutomation" という名前でデータベースを作成していることを確認します。</p>



Orchestrator IIS 構成を確認し、[次へ] をクリックします。**UiPath.Orchestrator.Setup.ElevatedSetupTool.exe** の実行を許可します。

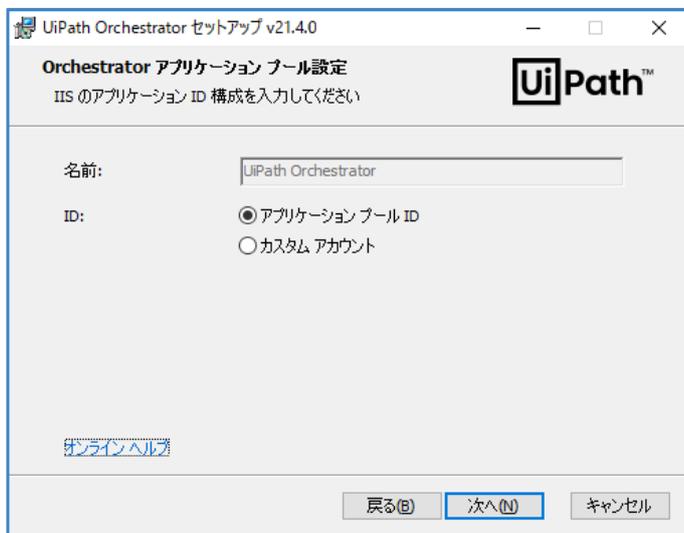
ホスト名は Orchestrator の接続 URL に含まれる FQDN を指定します。サーバー証明書のサブジェクト名と一致させます。

サーバー証明書が未作成の場合には[手順 2.3](#)を参照します。

SSL 証明書フィールドにはサーバー証明書のサブジェクト名を指定してください。

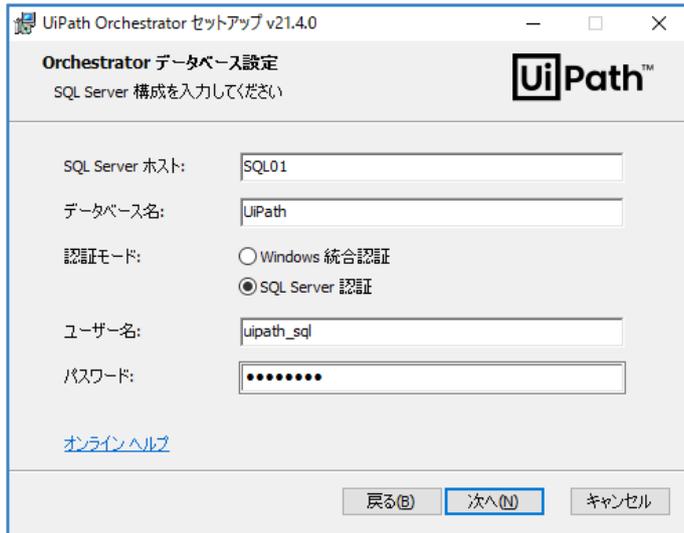
【OC v2020.10 以降】ドメイン証明書で「失効の関数は証明書の失効を確認できませんでした。」のエラーが発生する場合は[手順 2.3](#)で CRL 配布ポイントへのアクセスを確認します。

証明書が CA 上で失効されていないことを確認の上、インストールを続行することができます。



アプリケーションプール設定では、

- SQL Server に対して Windows 認証を使用する場合には、カスタムアカウントを指定し、SQL Server に権限のある Windows 資格情報を指定します。また NuGet パッケージの配置ディレクトリとしてファイルサーバーを指定する場合には読み取り/書き込み権限を持つユーザーを指定します。
- SQL Server 認証を使用する場合は、アプリケーションプール ID またはカスタムアカウントのいずれも指定することが可能です。

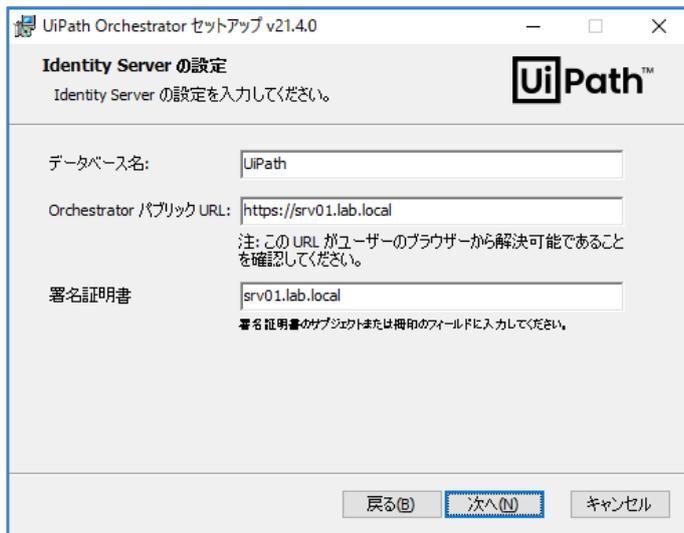


SQL Server ホスト (名前付きインスタンスを使用する場合は **Server\Instance** 形式で指定)、データベース名、認証方式、アカウント情報を入力します。

接続エラーが発生する場合には、SQL Server 側にてリモート接続設定、ファイアウォールと接続アカウントを確認します。詳細な手順は次のサイトをご参照ください。

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/sql/relational-databases/lesson-2-connecting-from-another-computer?view=sql-server-2017>

Windows 統合認証を指定した場合、現在 OS ログインのユーザーでデータベースが作成されることに注意してください。



【OC v2020.10 以降】 Identity Server 設定を行います。

Orchestrator パブリック URL には、Orchestrator アクセス URL を入力します。

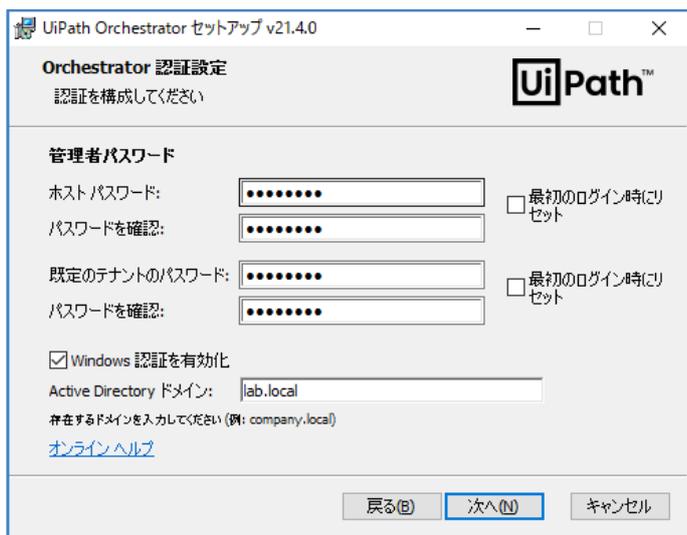
署名証明書にはサーバー証明書のサブジェクト名を入力します。同一サブジェクト名の証明書が複数存在する場合には拇印(Thumbprint)を指定します。

再度 **UiPath.Orchestrator.Setup.ElevatedSetupTool.exe** の実行を許可します。



Elasticsearch を使用する場合には URL を指定します。

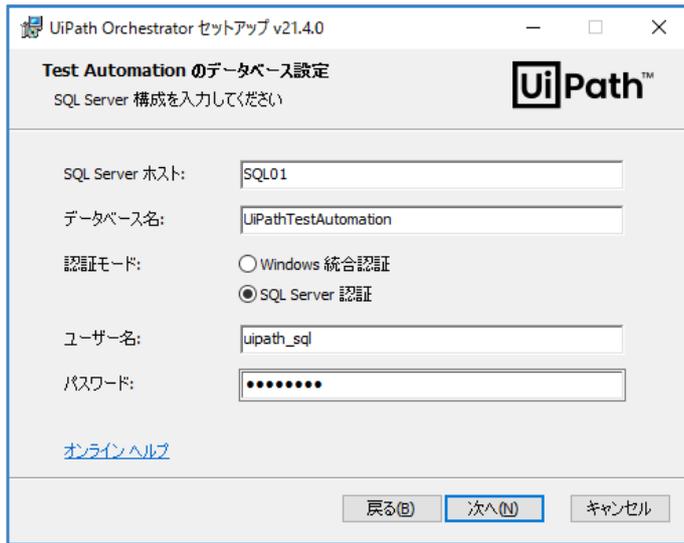
使用しない場合には空白のままにします。



Orchestrator ホストパスワード (テナント管理ユーザーが使用) と既定のテナントのパスワードを指定します。

パスワードは 8 文字以上でアルファベット小文字と数字を含む必要があります。

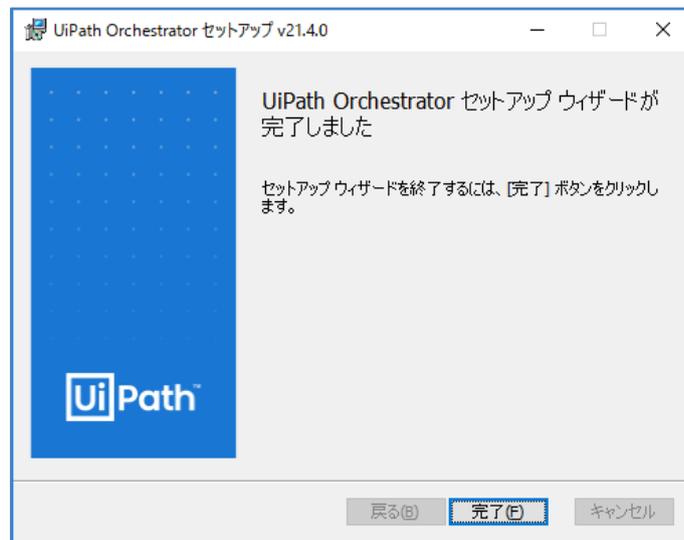
Orchestrator へのログインに Windows 認証を使用する場合は、チェックをオンにし、ドメイン名を指定します。



Test Automation 機能を使用する場合には、“UiPathTestAutomation” データベースが作成されている SQL Server ホスト、認証方式、アカウント情報を入力します。



インストールを開始します。
ユーザーアクセス制御 (UAC) のダイアログは [はい] を選択します。



インストールが正常に完了することを確認します。

既定のインストールディレクトリは **C:\Program Files (x86)\UiPath\Orchestrator** です。

インストールが失敗する場合には、管理者権限で次のコマンドを実行しインストールログを取得します。

```
msiexec /i UiPathOrchestrator.msi /! *vx
UiPathInstall.log
```

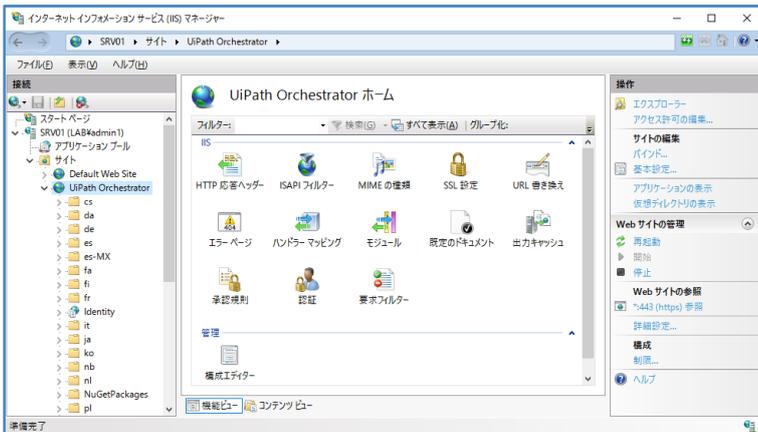
4. Orchestrator 動作確認と初期設定

4.1. Orchestrator インストール確認と初期設定

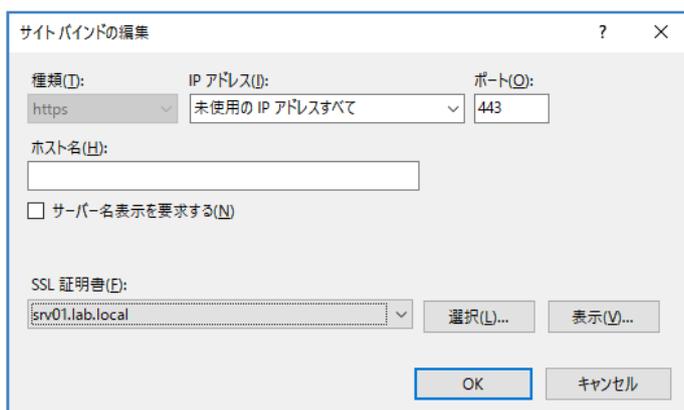
- 次の手順を実行して Orchestrator が正常にインストールされていることを確認します。



コントロールパネル\プログラム\プログラムと機能 (appwiz.cpl) で **UiPath Orchestrator** が表示されることを確認します。

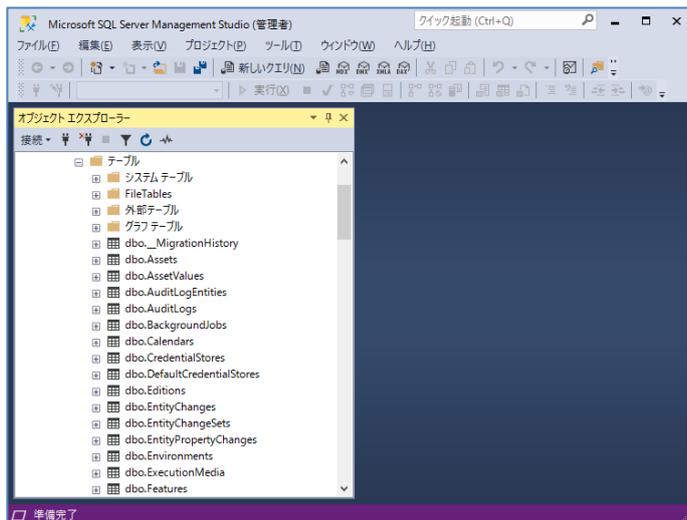


IIS 管理コンソールを開き、**UiPath Orchestrator** という名前でサイトが作成されていることを確認します。

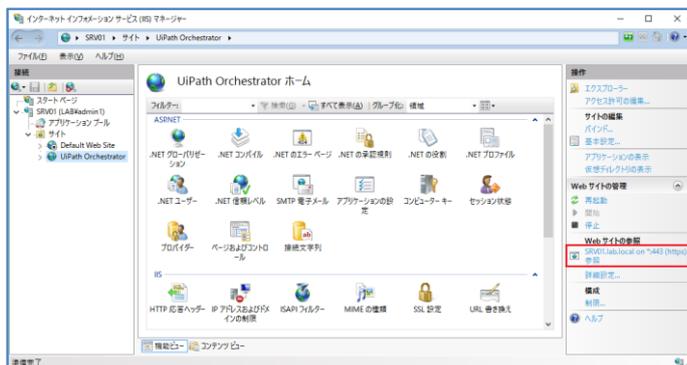


操作ペインのバインドをクリックし、https を編集、適切な SSL 証明書が選択されていることを確認します。適切でない場合には手動で証明書を選択します。

またブラウザでアクセスする FQDN と実際のホスト名が異なる場合は、ホスト名を空白にして OK をクリックします。

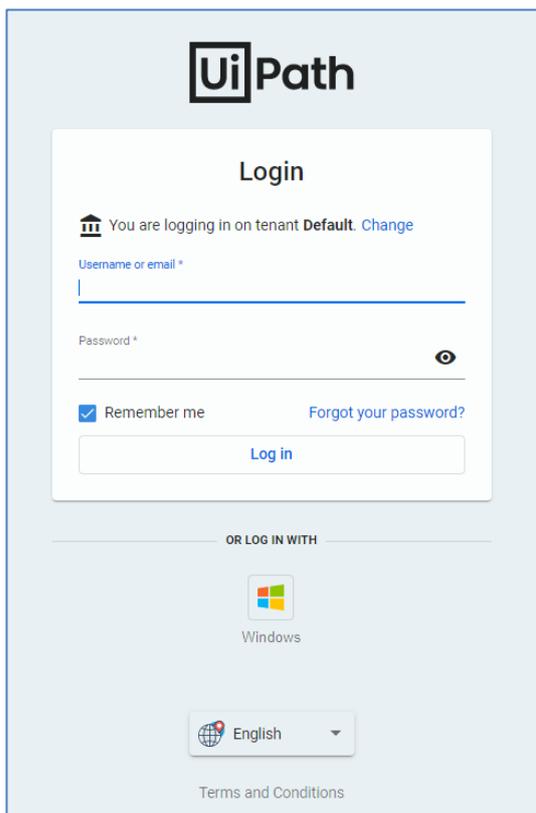


SQL Server Management Studio にてデータベース > "UiPath" > テーブルを展開し、テーブルが作成されていることを確認します。



IIS マネージャーで UiPath Orchestrator サイトを選択し、[Web サイトの参照] 下のリンクをクリックします。

このサイトが Orchestrator のアクセス URL になります。



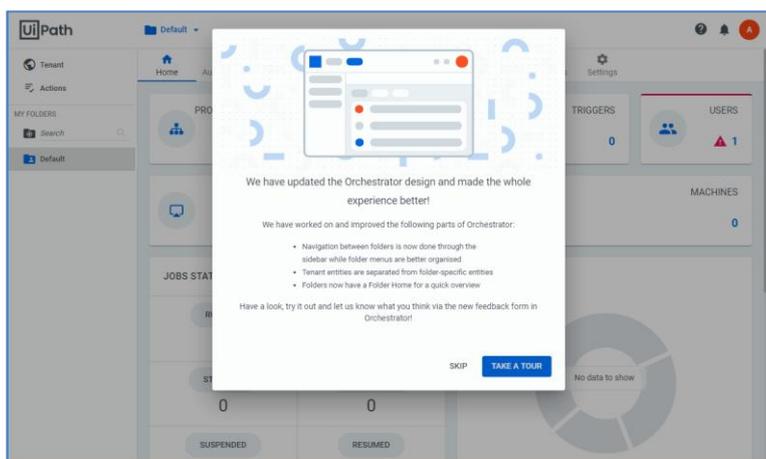
ログイン画面が正常に表示されることを確認します。

注意:

- 【OC v2020.10 以前】 IE11 を使用する場合は信頼済みサイトに追加します。
- 【OC v2021.4】 IE11 はサポート外となっているため Edge/Chrome/Firefox のいずれかを使用します。
- インストール時に Windows 認証を有効にした場合、OR LOG IN WITH [Windows] が表示されます。

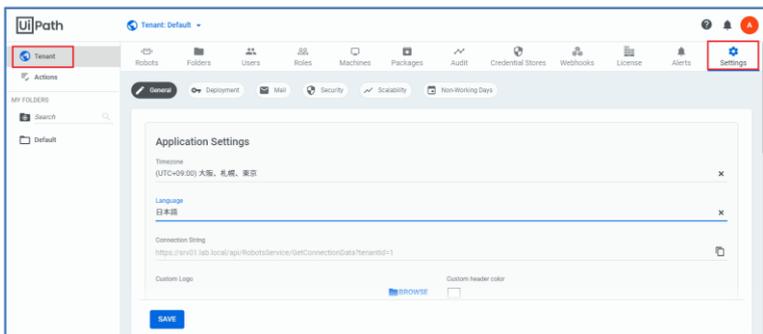
管理者アカウントで正常にログインできることを確認します。

- Tenant name: Default
- Username: admin
- Password: <インストール時に指定した既定テナントのパスワード>



【OC v2019.10】 ダッシュボードが表示されることを確認します。

【OC v2020.10 以降】 UI が新しいデザインに変更されたため、[TAKE A TOUR] でチュートリアルを開始するか [SKIP] でスキップします。このチュートリアルは右上のメニューから再度呼び出すことができます。

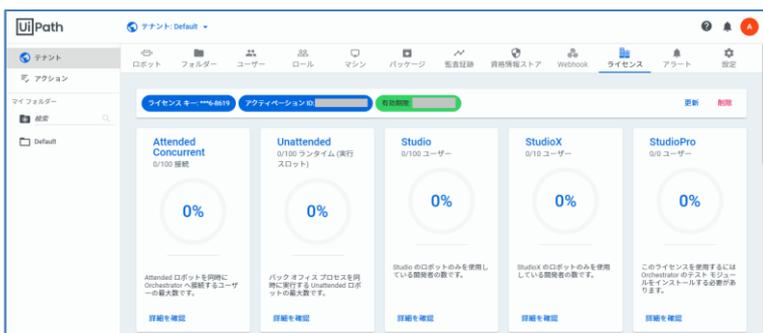


【OC v2019.10】 右上のユーザー > Settings を選択します。

【OC v2020.10 以降】 左上の Tenant をクリックし、右上のメニュー > Settings を選択します。

タイムゾーンを (UTC+09:00) 大阪、札幌、東京 に設定し、SAVE します。

※ 必要に応じて Language を 日本語 に切り替えます。本文書では以降の説明は日本語の言語設定を前提とします。



Orchestrator 管理画面にてオンラインまたはオフラインにてアクティベーションが可能です。詳細な手順は [こちら](#) をご参照ください。

4.2. UiPath Robot / Studio との接続設定

- 次の手順により、Studio/Robot 端末と Orchestrator の接続設定を行います。



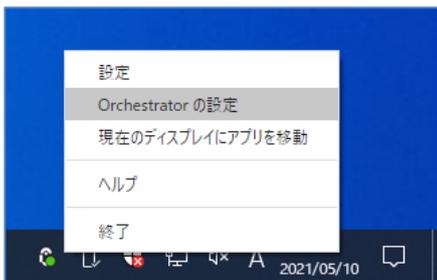
Orchestrator から UiPath Robot / Studio に接続するには、Orchestrator 管理コンソールでロボットのプロビジョニングを行います。

事前に標準マシンまたはマシンテンプレートを作成し、マシンキーを生成する必要があります。マシンキーは自動生成され、手動で変更することはできません。

マシンまたはロボットを新規作成できない場合には、次のサイトを参照して Orchestrator のアクティベーションを行います。

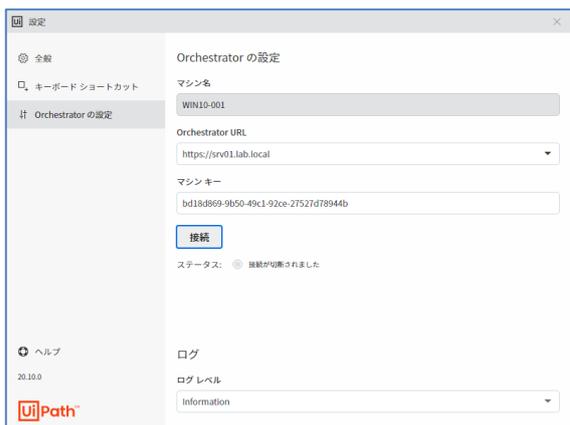
<https://docs.uipath.com/orchestrator/lang-ja/docs/activating-your-license>

マシンキーをクリップボードにコピーしておきます。

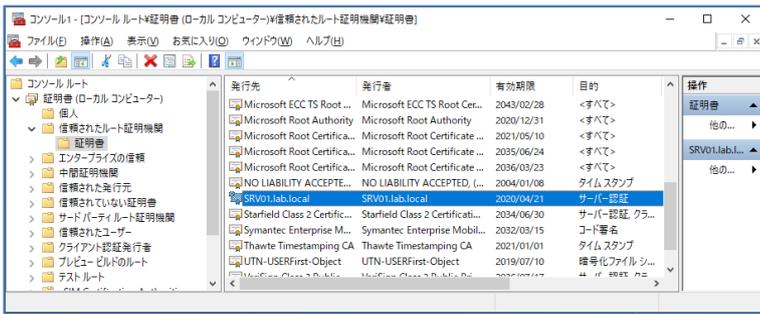


UiPath Robot がインストールされた端末に管理者でログインします。

通知領域の UiPath Assistant または Ui アイコンを右クリック→Orchestrator の設定をクリックします。



先ほどコピーしたキーをマシンキーフィールドにペーストし、Orchestrator URL を入力し、接続ボタンをクリックします。



「検証プロセスによると、リモート証明書は無効です」または「この要求の送信中にエラーが発生しました」というエラーが発生する場合には、次のサイトを参照して、サーバー証明書を端末にインポートします。

<https://docs.uipath.com/orchestrator/lang-ja/v2019/docs/using-a-certificate-for-the-https-protocol#creating-a-self-signed-security-ssl-certificate-and-deploying-it-to-client-machines>

※ 証明書ストアは現在のユーザーではなくローカルコンピューターであることに注意してください。

【クラシックフォルダー】



クラシックフォルダーでは Orchestrator 上でマシンキーを作成したマシンを使用して標準ロボットを登録し、状態が利用可能と表示されることを確認します。

モダンフォルダーではマシンテンプレート>その他のアクション>インストールされたバージョンをクリックし、状態が利用可能と表示されることを確認します。

【モダンフォルダー】



5. 技術支援のご案内

- UiPath 社では Orchestrator および周辺のテクノロジーに関わる技術支援の有償コンサルティングサービスを提供しております。下記のような課題に対して技術支援が必要なお客様は弊社担当営業までご相談ください。
 - Orchestrator 設計・構築・運用
 - ◇ シングル構成または冗長構成での導入支援
 - ◇ オンプレミスまたはパブリッククラウド環境への導入支援
 - Orchestrator / Studio / Robot のバージョンアップ
 - ◇ ベストプラクティスに基づくバージョンアップ作業手順の策定支援
 - Elasticsearch / Kibana 導入・活用
 - ◇ ダッシュボード作成によるログ可視化の活用支援

以上